

大学では 思った以上に挑戦できる それを高校生に伝えたい

長崎県立大村高等学校 国語教員

下田杏奈

創立一三〇周年、 伝統の高校で

鳥のつばさのように両翼に広がった校舎が美しい、長崎県立大村高等学校。歴史と風格を感じさせるこの高校は、今年、創立一三〇年を迎えました。記念すべきこの年、長崎大学教育学部を卒業した下田杏奈さんが国語の教員として赴任し、日々奮闘しています。取材したのは八月中旬。夏休みかと思いきや、すでに授業が七時間みっちり。校内ですれ違う生徒たちも多く、みんな気持ちよく挨拶してくれます。下田さんも自然な笑顔で応えていました。

「八月末には文化祭、その翌週には体育大会が控えているので、今はその準備に追われています。十月の長崎がんばらんば国体では、本校がクライミング競技の会場になっています。私は山岳部（クライミング）の顧問なので、受け入れ業務もあり、気が抜けません」。なんと、赴任していきなり特別行事が多い年だなんて……大変ですね。「はい、もういっぱいいいな感じですよ。二年生の副担任もやっています。教科で受け持っているのは現代文と古典合わせて六クラス。課題のチェック、テストの採点、授業用のプリント、そして課題をやったことなかった生徒にも声をかけていといけないし……叱るのは苦手です……なんて言われてられない（笑）」。

副担任が二年生ということには、何歳違いますか？
「六歳です。だから女子生徒は興味の対象も近くて話題は合いますよ。男子は……私はそれほど意識しないのですが、やはり戸惑った反応をされたりして、ちょっと難しい。悩んだら、先輩の先生方にご相談することもあります」。

実は下田さん、長大の教育学部では、小学校教育コースを専攻していました。主免（卒業と同時に取得できる免許）で小学校教諭、副免（所定科目の単位修得により取得できる免許）で中・高校教諭を取得したのだそうです。「副免を取得する人は多いけれど、それで高校の先生になる人は珍しいかもしれません。私自身、高校の教育実習経験はなく、小中学校との違いに最初はとまどいました。児童の場合、先生がある意味、役者になって叱ることもあります。高校生はほぼ対等。意見もしっかりと合います。勉強の面白さも違うし専門性も高くなり、生徒はバシバシ質問してきます。一を教えるのに十知っておかなければ質問にも答えられません。帰宅後に勉強することが多くて、専門書や教育書を買って込んだのはいいけれど、読まないうちにどんどん溜まっちゃう（笑）。早く先輩の先生方のように、独自のスタイルを確立させたい。とはいえ、一歩一歩ですね」。

経験↓勉強↓また経験
いい循環が生まれる

学生時代は、周囲から「よく動くね！」と感心されるほどの行動

指す生徒たちに「大学って、あなたが思うよりずっといろいろなこととに挑戦できるんだよ」と、伝えられたらいいですね」。

人として魅力のある先生になるために、もつと経験を積んでいきたいという下田さん。大学で培ったチャレンジ精神をバネに、高校生の心に届く教育にも果敢に挑戦しています。彼女の教師生活は今まさに始まったばかりですが、その可能性は未来へと広がっています。

※ナガサキ・ユース代表団／長崎県、長崎市、長崎大学の三者で構成する「核兵器廃絶長崎連絡協議会」が主催する人材育成プロジェクト。核軍縮や核不拡散問題に関する国際会議へ参加し活動するもので、英語力や核問題への関心に関する選抜試験を経て選ばれる。（詳しくは「チヨール」48号16頁）

Column

チヨール145号「卒業生に聞く」で紹介した、九十九島動物園の飼育員の村山友美さん（環境科学部卒業生）が、ついに念願のツシマヤマネコの子に成功しました。今年五月に生まれた二頭のオスの赤ちゃんは、現在すくすく成長中。「成功の要因は、環境省や他の飼育園のご協力、それに繁殖適齢期の個体のすべてのペアの同居を集中的に行えたこと。妊娠がわかったときは、ほっとしました。今後は繁殖技術の確立が課題です」と村山さん。



しもだあんな
2014年長崎大学教育学部卒業後、長崎県立大村高等学校に赴任。大学在学中はナガサキ・ユース代表団にも選抜され、スイス・ジュネーブで行われた核不拡散条約再検討会議準備委員会に参加。福島県川内村の「復興子ども教室」にも関わり、平和教育などに携わる。